

パニウム - 第二十二号

2023年12月31日

Jeff Pippenger

2026-03-12

2023年12月31日以来、ユダ族の獅子は、特定の順序に従って予言的真理の封印を解いてこられる。その順序は、Future for

Americaのウェブサイトに掲載されてきた記事を検討すれば、容易に確認できる。

ここ数か月の間に解かれてきた真理は多く、しかも深遠である。

その順序は偶然的なものではなく、意図的なものである。この系列は、キリストがユダ族の獅子として、教会に対し、さらにその後には世界に対して、最後の試練のメッセージの封印を解かれる際に、成し遂げられる目的をもった順次的過程を明確に示している。黙示録において、ユダ族の獅子は七つの封印で封じられた書を取り、封印を順序正しく一つずつ解いていかれる。

それぞれの順序に従って明らかにされる

この七つの雷が声を響かせたのち、その小さな巻物に関して、ダニエルの場合と同様の命令がヨハネに与えられる。「七つの雷が語ったことは封印せよ」。これらは、やがて順を追って明らかにされる将来の出来事に関するものである。ダニエルは終わりの日に自分の受ける分に立つ。ヨハネはその小さな巻物が封印を解かれているのを見る。そのとき、世界に告げられる第一、第二、第三の天使のメッセージの中に、ダニエルの預言はしかるべき位置を占める。小さな巻物の封印が解かれたことは、時に関するメッセージであった。

ダニエル書と黙示録は一つである。一方は預言、他方は啓示であり、片方は封印された書、もう片方は開かれた書である。ヨハネは雷鳴が語った奥義を聞いたが、それを書き記してはならないと命じられた。

「七つの雷鳴に表された、ヨハネに与えられた特別な光は、第一と第二の天使のメッセージのもとで起こる出来事の描写であった。人々がこれらのことを知るのは最善ではなかった。彼らの信仰は必然的に試みられなければならなかったからである。神のご計画の順序に従って、最も驚くべき、進んだ真理が宣べ伝えられるであろう。第一と第二の天使のメッセージは宣べ伝えられるべきであったが、これらのメッセージがそれぞれの特定の働きを果たすまでは、さらなる光は明らかにされないことになっていた。これは、片足を海に置いて立つ天使が、きわめて厳粛な誓いをもって『時はもはやない』と宣言していることによって表されている。」セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第7巻、971頁。

「七つの雷」に関する最終的な啓示は2023年以降に開かれ、「七つの雷」が、初めのアルファの失望から終わりのオメガの失望に至るまでを表していることが明らかにされた。「七つの雷」の啓示は、歴史における単一の成就ではなく、ミラー派の歴史において起こり、終わりの時代に再び起こるのである。「出来事の区分」の例証であったため、ヨハ

ネは「七つの雷」を明確に規定することを許されなかった。完全な成就是、2020年7月18日から、間もなく到来する日曜法に至る歴史を例証するために示された。獅子はその光を開示し、それをもって十四万四千人のための神殿の建立の歴史を照らした。

ミラー派の歴史において、「七つの雷」は、ミラー派が「きわめて驚くべき、また進んだ真理」を提示した1798年から1844年に至る期間を象徴していた。彼らに与えられた務めを遂行する中で、ミラー派は試みられた。彼らは、自らが宣べ伝えていたメッセージも、彼らが成就しつつあった歴史も、十分には理解していなかった。彼らの宣べ伝えた真理は、ホワイト姉妹が「進んだ真理」と定義するものであり、それは、第一と第二の天使のメッセージがその働きを果たした後までは理解されるものではなかった。

「七つの雷」が完全に成就するとき、その「将来の出来事」は、『ダニエル書』と『ヨハネの黙示録』十四章の三天使の宣言とを結合したものによって示される。「七つの雷」の「将来の出来事」によって示されている十四万四千人の務めは、ダニエル書と三天使の宣言とを結合することである。

主は、その不義のゆえにこの世をまもなく罰せられる。彼は、彼らに与えられている光と真理を拒んだために、宗教諸団体をまもなく罰せられる。第一、第二、第三天使の使命を結合した大いなるメッセージは、世界に伝えられなければならない。これが私たちの働きの中心的な務めであるべきだ。セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第7巻 950ページ。

2023年12月31日以来、ユダ族の獅子は、特定の「順序」に従って、預言的真理の封印を解いてこられた。

ミラー派の歴史

現在生きている者の中には、ダニエルとヨハネの預言を研究し、特別の預言がその順序に従って成就していく過程をたどりながら、神から大いなる光を受けた者たちがいる。彼らは時のメッセージを人々に伝えた。真理は真昼の太陽のように明らかに輝いた。預言の直接的成就を示す歴史的諸事件が人々の前に提示され、その預言は、地上の歴史の終結へと連なる諸事件の象徴的描写であることが見て取られた。Selected Messages 第2巻、101、102。

キリストが『真夜中の叫び』のメッセージの封印を解いてこられたその『順序』は、『預言の直接的成就』を示す『歴史的イベント』を指し示しており、それらは恩恵期間の終結へと導く。終わりの時代における預言の直接的成就是、時に基づく預言の啓示ではない。しかし、パルモニはなお、預言の直接的成就を識別するために数を用いる。時はもはやない。そして、ミラー派が自らの世代に『時のメッセージ』を担ったとはいえ、第三天使のメッセージは『時』よりも強力である。

主は私に、第三天使のメッセージは出て行って、散らされている主の子らに宣べ伝えられなければならない。またそれを時期の設定に結びつけてはならないと示された。というのは、時期は二度と試しとはならないからである。私は、時期を説くことから生じる偽りの興奮に駆られている者がいるのを見た。第三天使のメッセージは、時期というものよりも力強いのだ。私は、このメッセージは自らの土台の上に立つことが

でき、それを強めるために時期を必要とせず、大いなる力をもって進み、その働きをなし、義において速やかに終わらされるのを見た。Experience and Views, 48.

預言的真理の封印が解かれていく連続的な「順序」は、漸進的な歴史を指し示すが、同時にメッセージの展開も指し示す。表象されている歴史の「順序」も、また、12月31日以降、ユダ族の獅子がいかにしてメッセージの封印を解いてきたかという歩みも、いずれも理解することが救済上重要である。2023年7月、荒れ野で叫ぶ者の声が、2023年12月31日の封印を解くことに向けて道を備え始めた。その後、ユダ族の獅子が、ヨハネの黙示録第1章の封印を解いた。

他には何もものもない

「黙示録においてその順序に従って与えられている厳粛な諸メッセージは、神の民の思いにおいて第一の地位を占めるべきである。他のいかなるものにも、私たちの関心を独占することを許してはならない。」『証言』第8巻、301、302頁。

2023年に開始された諸記事は、「神の民の心において首位を占める」ものとされている。

神が預言史において過去に成就すべきものとして定められたことはすべて、すでに成就した。さらに、なお順序に従ってこれから起こるべきことも、ことごとく成就するであろう。神の預言者ダニエルはその持ち場に立っている。ヨハネもその持ち場に立っている。黙示録において、ユダの部族の獅子は、預言を学ぶ者たちにダニエル書を開いた。こうしてダニエルはその持ち場に立っているのである。彼は、私たちがその成就のまさに目前に立っているときに知っておかねばならない、重大にして厳粛な出来事について、主が幻のうちに彼に啓示されたことを証言している。

歴史と預言において、神の御言葉は、真理と誤謬との間に長く続いてきた闘争を描き出している。その闘争はいまなお進行中である。かつて起こった事柄は、繰り返されるであろう。『セレクトッド・メッセージ』第2巻、109頁。

三十

ダニエル書十一章四十節のメッセージは1996年に封印が解かれ、定式化された。三十年後、まさに同一の節に関する隠された歴史が、「真夜中の叫び」のメッセージの定式化と関連して、今や封印が解かれつつある。その「真夜中の叫び」のメッセージとは、訂正された内的な「真夜中の叫び」のメッセージと結びついた、イスラームに関する訂正された外的予言から成るものである。「真夜中の叫び」のメッセージは、十六節における日曜法に先立って宣べ伝えられる。というのは、たとえ話において戸が閉じられるのは、まさに日曜法の時だからである。

ペトロ

このことは、ペテロを、十四万四千人の封印の歴史の中に位置づける。ペテロには、二階の広間で宣べ伝えたメッセージと、神殿で宣べ伝えたメッセージがあった。二階の広間のメッセージは、たとえにおける「真夜中の叫び」であり、神殿のメッセージは第三天使の大いなる叫びである。ペテロが二階の広間における「真夜中の叫び」のメッセージを宣べ伝えるためには、まずペテロのメッセージが訂正され、定式化される必要があった。そ

の訂正と定式化は、2023年12月31日以来ユダの部族の獅子が特定してきた預言の諸系列を統合することによって達成される。

今なすべき業は、「真夜中の叫び」のメッセージを定式化することである。メッセージの定式化は、1831年のウィリアム・ミラー、および1996年の『The Time of the End』誌によって予表されている。2020年7月18日に第一の失望を生じさせたメッセージの訂正は、ジョサイア・リッチとサミュエル・スノーの双方によって予表されている。彼らがそれぞれ遂行した業は、1840年8月11日の後に続いた展開、ならびに第七の月の運動の後に続いた展開という「効果」を「惹起」した。1840年には、そのメッセージは世界のすべての宣教拠点に運ばれ、1844年には「真夜中の叫び」のメッセージが、津波のごとくアメリカ合衆国の東海岸一帯を席卷した。人間の業が、聖霊の注出という「効果」を「惹起」したのである。1840年は海により象徴される世界へ、1844年は地により象徴されるアメリカ合衆国へ向かった。1840年の象徴は、黙示録第十章における地と海の上に立つキリストであり、まさにその章は、1840年から1844年に至る歴史を同定し、地と海の上に立つキリストを描写している。

1840年と1844年の両年において、予言の修正は時点をさらに後へとずらし、正確な期日に一致させるものであった。一方はイスラームに関する予言であり、他方は十人の乙女のたとえに関する予言であった。一方は外的なもので、他方は内的なものであった。さらに、1844年には聖所を誤解していたという誤謬も含まれていた。聖所は地球を指すのか、それとも天上の聖所を指すのか。その誤解は、単に聖所の定義にとどまらず、魂が聖所から至聖所へと移られるキリストに従うか否かをも試すものであった。

私は、父が御座から立ち上がり、火のように燃える戦車に乗って垂幕の内にある至聖所に入り、そこにお座りになるのを見た。次いでイエスが御座から立ち上がられると、うち伏していた者たちの大半も御共に立ち上がった。彼が立ち上がられた後、無頓着な群衆に向かってイエスから一条の光さえも通るのを私は見なかった。彼らは全くの暗黒の中に取り残された。イエスと共に立ち上がった者たちは、彼が御座を離れて彼らを少しの道のり導き出される間、彼から目を離さずにいた。すると彼は右の御腕を上げられ、私たちはこう仰せになる麗しい御声を聞いた。「ここで待っていなさい。わたしは御国を受けるために父のもとへ行く。あなたがたの衣を汚れなきままに保て。間もなく、わたしは婚礼から戻ってきて、あなたがたをわたしのもとに迎える。」そのとき、炎のように燃える車輪を備え、御使いたちに囲まれた雲の戦車が、イエスのおられる所にやって来た。彼はその戦車に乗り、父がお座りになる至聖所へと運ばれた。そこで私は、偉大な大祭司であるイエスが、父の御前に立っておられるのを見た。その衣の裾には、鈴とざくろ、鈴とざくろが付けられていた。イエスと共に立ち上がった者たちは、至聖所におられる彼に向けて信仰を捧げ、「わが父よ、御霊を私たちにお与えください」と祈った。するとイエスは彼らに聖霊を吹きかけられた。その息のうちには、光と力、そして豊かな愛と喜びと平安があった。

私は振り向いて、なおも御座の前にひれ伏している一団を見た。彼らは、イエスが御座を離れられたことを知らなかった。サタンは御座のかたわらに居るかのように見え、神の御業を遂行しようとしていた。彼らが御座を仰ぎ見て、「父よ、あなたの御霊を私たちにお与えください」と祈るのを、私は見た。するとサタンは、彼らの上に聖ならざる影響を吹きかけた。その中には光と大いなる力はあったが、やさしい愛と喜

びと平安はなかった。サタンの目的は、彼らを欺かれたままにとどめ、さらに引き戻して神の子らを欺くことであった。Early Writings, 55, 56.

聖所は、聖所の誤解によって生じた一切の誤解を説明する「鍵」であるとされた。それは、失望を説明する「鍵」でもあった。終末においては、「鍵」は失望であり、その失望が神殿の誤解を説明する。

1844年10月22日をもって「時はもはやない」となり、2020年7月18日の失望の誤謬は今や是正されなければならないが、時の問題としてではない。なぜなら、「時はもはやない」からである。

私が海の上と地の上に立っているのを見たその御使いは、天に向かって手を上げ、世々限りなく生きておられる方、すなわち天とそこにあるもの、地とそこにあるもの、海とそこにあるものを創造された方にかけて誓って言った。「もはや時は延ばされない。しかし、第七の御使いの音がする日、彼が吹き鳴らし始めるときには、神の奥義は成就する。神がその僕である預言者たちに告げられたとおりにある。」ヨハネの黙示録 10:5-7.

訂正されなければならない予言の場所はテネシー州ナッシュビルであり、その場所は変更し得ない。なぜなら、それはFuture for Americaによってではなくエレン・ホワイトによって特定されており、予言の霊は決して誤ることがないからである。

ナッシュビルにいたとき、わたしは人々に語っていた。そして夜のさなか、天からまっすぐに下ってきてナッシュビルにとどまる、巨大な火の球が現れた。その球からは矢のように炎が放たれ、家々は焼き尽くされ、家々は揺らぎ、倒れ落ちていった。わたしたちの者のうち幾人かがそこに立っていた。「ちょうどわれわれが予期していたとおりに」と彼らは言った。「われわれはこれを予期していたのだ。」他の者たちは苦悶して手をもみ、神に憐れみを呼び求めている。「あなたがたは知っていたのだ」と彼らは言った。「これがやって来ることを知っていたながら、わたしたちに警告の言葉を一言も語らなかったのか！」彼らは、知っていた者たちがこれまで決して彼らに告げず、いかなる警告も与えなかったのだと考えて、ほとんど八つ裂きにするばかりの勢いで、知っていた者たちに迫るかのように見えた。原稿第188号、1905年。

ナッシュビルに降りかかる火球の内在的意味は、ラオデキヤ的セブンスデー・アドベンチズムがナッシュビルの警告メッセージを知っていながら沈黙していたことを指し示している点にある。これは、預言史において、「真夜中の叫び」のメッセージの「恥」または「喜び」が顕在化する時点である。この時点において、旗印となるべき者たちが、ラオデキヤ的セブンスデー・アドベンチズムがナッシュビルの警告を与えなかったことに苛立ち憤る世の人々によって辱められる者たちと区別されて、高く掲げられ始める。この同じ預言的な区別は、カルメル山におけるエリヤとバアルの預言者たちとの間、またミラー運動史における第二天使の歴史において、プロテスタントが背教的プロテスタントへと変じ、偽預言者としての役割を開始し、ローマの娘たちとなったときにも表象されていた。1989年には、政治的角がレーガンを通してまったく同様のことを行った。ただしレーガンはローマの娘たちとはならず、ローマの情夫であるアハブおよびクロヴィス一世となった。

私に一つの光景が示された。安息日の前夜であった。まさにそのとき、その光景が示された。私は窓の外を見やると、天から下ってきた巨大な火の球があり、それが、柱を備えた建物を建設している場所に落ちた。とりわけ柱が私に示された。その火の球は建物にまさに向かってきて、それを打ち砕いたかのようで、彼らはそれが分岐し、分岐して、拡大していくのを見た。そして彼らは叫び、嘆きに嘆き、手をもみしだし始めた。私は、私たちの者のうち幾人かがそこに立っていて、「まさしく、それは私たちがずっと予期してきたことだ。まさに私たちがこれまで話してきたとおりで。まさに私たちがこれまで話してきたとおりで」と言っているのを見たと思った。人々は言った。「あなたがたはそれを知っていたのですか。知っていながら、私たちには知らせなかったのですか。」彼らの顔には、その様子には、なんと深い苦悶が現れていたことか、と私は思った。手稿152:1904年。

2020年7月18日の失望は、旗印として高く掲げられるべき神殿を識別するための「鍵」である。アドベンチストの二つの階級の区別は、聖書預言の主要な主題である。エレミヤは「あざける者の会衆」に加わることを拒み、スミルナとフィラデルフィアの諸教会はいずれも、自分たちはユダヤ人であると称しながら実はそうではない「サタンの会衆」と対置された。アドベンチストであると称する者たちの二つの階級の区別は、彼らが聖書を研究する際に用いる方法論によって示される。それは、ホワイト夫人が「いわゆる高等教育」と呼ぶものと真の教育との区別である。

ナッシュビルは「南部のアテネ」として知られており、ナッシュビルにおいてギリシアを象徴する最も著名な建造物は、センテニアル・パークにあるパルテノンである。これは、古代ギリシアのパルテノン神殿を原寸大で復元したもので、1897年に建設された。1796年のテネシー州の州昇格百年を記念して建てられ、祝典後には取り壊される予定であった。しかしながら、1903年にその用地は公園とされ、1920年から1931年にかけて、パルテノンは恒久的な建築として再建された。

「パルテノン」という名称は、『処女』『乙女』を意味するギリシア語 parthénos（パルテノス）に由来し、純潔にして賢明、かつ武勇に富む、知恵・戦略・芸術・工芸・文明の女神としてのアテーナーの側面を指す。アテナイのアクロポリスにおいて紀元前447年から同432年にかけて建設され、彫刻家フェイディアス作の巨大なクリュセレファンティン（黄金と象牙）製のアテーナー像を安置したこの建造物は、本質的には彼女の「家」、すなわち神的住居として機能し、そこに彼女が臨在すると信じられていた。

西洋の教育制度が、幅広い知識、批判的探究、市民的形成、そしてリベラル・アーツの枠組みを重視することは、根底において古代ギリシアの哲学と実践に根ざしている。プラトンのアカデメイア、アリストテレスのリュケイオン、あるいはアテナイのパイディアがなかったなら、我々が知る現代の学校教育はまったく異なる様相を呈していただろう。

1904年、ナッシュビルから9マイル離れた郊外にマディソン・スクールが設立された。エレン・ホワイトは、創設当初のマディソン・スクール（正式名称はナッシュビル農業・師範学院、のちにマディソン・カレッジとして知られる）の理事会の創立メンバーであった。彼女は1904年の発足時から理事会の創立メンバーとして奉職した。彼女は1914年頃まで理事会に留任した（1915年の逝去の前年に当たる）。

これは、彼女が生涯を通じて、加わる、あるいは理事として務めることに同意した唯一の大学または機関の理事会であった。彼女は、アドベンチストの他の諸機関におけるその種の公的地位を意図的に制限していたが、マディソンについては、彼女の教育的勧告と一致していたため、例外とした（自給自立で農場を基盤とし、聖書と労作、ならびに南部およびそれ以遠における奉仕のための実際的準備を強調する宣教志向の訓練）。ホワイト夫人からのナッシュビルに関するメッセージは1904年と1905年に与えられたが、これはちょうどマディソン校が発足しつつあり、またパルテノンの展示が常設公園の恒久施設へと改められつつあった時期と一致する。ギリシャ的教育の象徴と天的教育の象徴とが、いずれも同じ短い期間にその始まりを画したのであり、しかもそれはナッシュビルの火球の幻が与えられたのと同じ時期であった。

昨夜、ある光景が私の前に示された。私はその全体を明らかにしてよいとは、おそらく決して思えないが、少しだけ述べよう。

巨大な火球が地上に降下し、大きな家々を押し潰したかのように見えた。所々で「主が来られた！ 主が来られた！」との叫びが上がった。多くの者は主にまみえる備えができていなかったが、わずかの者は「主をほめたたえよ！」と言っていた。

「なぜ主を賛美しているのか」と、突然の滅びが自分たちの身に臨みつつあった者たちは問うた。

『なぜなら、今やわれわれは、これまで探し求めてきたものを見ているからである。』

「『これらのことが起こるとあなたがたが信じていたのなら、なぜ私たちに告げなかったのか』——それが恐るべき返答であった。『私たちはこれらのことを知らなかった。なぜ私たちを無知のうちに置いたのか。あなたがたは幾度となく私たちと顔を合わせていながら、なぜ私たちと知り合いになって、来たるべき審判について、また私たちが滅びることのないように神に仕えなければならぬということ、私たちに告げてくれなかったのか。今や私たちは滅びてしまった！』 原稿102、1904年。」

ナッシュビルのメッセージの文脈は、地理的な事柄を、真の教育か偽りの教育かという霊的な枠組みの中に位置づけるものであった。すなわち、魂を天の市民とするか、あるいは地上の市民とするかに備えさせる教育である。ホワイト夫人のナッシュビルに関する幻象にはイスラムへの言及は見られない。それならば、ナッシュビルにおける火球の幻象にイスラムを結び付ける根拠はいかなるものか。2020年のナッシュビル・メッセージの修正は、ジョサイア・リッチおよびサミュエル・スノーの業績とどのように整合するであろうか。彼らの修正は、最初の予告へと導いたのと同じ証拠が、修正された予告を確立する証拠でもあることを彼らが認識したときになされた。

イスラームに関する証左は、ナッシュビルの警告のメッセージと結び付けられるよりもはるか以前に確立されていた。イスラームのメッセージは、第三天使のメッセージに直接結び付いている。この事実はいくつかの聖書的証言によって示されている。第三天使の警告は、北の王の権威の印に関する警告を表しており、イスラームの警告は、東方の子らの警告によって表象されている。

しかし、東からと北からの知らせが彼を騒がせる。それゆえ、彼は大いなる憤りをもって出て行き、滅ぼし、多くの者をことごとく絶ち滅ぼそうとする。ダニエル書
11:44

第三の天使は、第七のラッパが吹き鳴り始めた1844年10月22日に、歴史の中に到来した。第七のラッパはまた、イスラームにおける第三の災いでもある。1863年の反逆は、第七のラッパの響きを9/11まで沈黙させたが、そのとき、黙示録第十八章において第三の天使が降臨し、ニューヨークの大いなる建造物が神の力の一触によって打ち倒された。

9/11は封印の時期のアルファ、すなわちその始まりであり、この封印の時期は、まもなく到来する日曜令において、十四万四千人の封印がオメガ、すなわちその終わりに至るときに終結する。

9/11は、アメリカ合衆国における「獣の像」の試練の時のアルファであり、この試練の時は、アメリカ合衆国における「獣の像」の試練の時のオメガ、すなわちアメリカ合衆国で「獣の刻印」が強制される時に到来するそのオメガにおいて終結する。

9/11は、地の獣およびその共和主義とプロテスタンティズムの角に対する生ける者の審判のアルファ、すなわち始まりであり、その審判はまもなく到来する日曜法において終結する。

9/11は、「主の備えの日」のアルファであり、それは主の安息日に関する試験において終結する。

9・11は、礎石によって象徴される神殿造営のアルファであり、オメガの頂石が神殿の上に据えられるときに終結する。

9/11は、アメリカ合衆国における第三の災いのアルファであり、それは、間もなく到来する日曜法である黙示録十一章の地震において終結する。その地震において、第三の災いは速やかに到来する。ナッシュビルの火の玉の歴史は、ラオデキヤ的アドベンチストを断罪し、「今やわれわれは失われた」と表明する者たちの宣言にもかかわらず、日曜法において恩恵期間が閉じられる以前のものである。

ヨエル書とそのペンテコステにおける成就是、知識の増し加わりを理解できない一群の者が、理解する者たちを酔っていると非難する時、真夜中の叫びのメッセージをめぐる論争を提示する。エフライムの酔っている者たちと賢い者たちの対峙は、神の預言の御言葉においてしばしば取り上げられる主題である。真理の一要素は、そのメッセージが二段階のメッセージであるということであり、それは二階の広間におけるペテロ、さらにその後の神殿における彼の働きによって例証される。これは、さばきがまず神の家から始まり、その後、神の家の外にいる者たちへと及ぶというかたちでも表象される。このさばきの過程はまた、黙示録十八章の二つの声によっても示されており、そこでは第一の声が9/11から日曜法に至るまでを示し、ついで四節の第二の声が日曜法を画する。後の雨に関する真偽の預言的メッセージの識別もまた、マラキが恩恵期間の終結直前に帰って来る者として指摘するエリヤによって例証されている。

カルメル山における賢者と愚者の象徴は、「賢者エリヤ」と、愚かなバアルの預言者たちであった。エリヤはペテロを表し、バアルの預言者たちはエフライムの酔いどれを表す。愚かな酔いどれが火の降り注ぎによってバアルの偽預言者として明らかにされるとき、民はついに「主こそ神である」と答える。ラオデキア的なセブンスデー・アドベンチストは、ナッシュビルの予告の成就において、そのように明らかにされる。そのとき、アドベンチズムの外にあって愚かな者の不忠実に目を覚まされる者たちは、確信へと導かれるが、彼らの猶予期間はまだ閉じられてはいない。ナッシュビルの警告メッセージによって表される、賢いおとめと愚かなおとめの顕現の例証は、十人のおとめのたとえの最終的かつ完全な成就における道標である。

2020年7月18日の失望は、修正されるべきメッセージを規定し、またアドベンチズム内部における、油を持つ者と持たない者の顕在化をも規定する。ナッシュビルを警告する「油のメッセージ」を欠いていた者たちは、油を有する者たちと対比される。油のメッセージを有する者と有しない者という二つの階級のうち、一方の階級は、ミラー派の歴史における最初の失望によって表される失望を経験しており、他方はその経験を持たない。ミラー派を型とする失望がなければ、失敗に終わったいかなる予測に対しても行うべき修正は存在しない。2020年のナッシュビルに関する予測がイスラームを特定していたという事実は、修正を要する失敗したメッセージの一要素と整合している。

このことの一つの証左は、ナッシュビルの火球が到来するという歴史が、ミラー派の最初の失望とそれに続くメッセージの訂正という歴史と一致するのみならず、9/11における第三天使の到来（それは第三の災いのイスラームの到来を標示する）を起点とし、さらに『黙示録』十一章の日曜令の地震においてイスラームが預言的に再び到来するという歴史の内部で生起している、という事実に見いだされる。ホワイ夫人がイスラームおよびナッシュビルの警告に直接言及していないにもかかわらず、メッセージの中にイスラームを保持することは、その歴史の主題がイスラームであるという点に基づいている。

『ダニエル書』と題する連載の第百五十三回の論考において、私たちは、バラムと雌ろばの証しに一致して、雌ろばによって表象されるイスラームが、9/11から日曜法に至る歴史の中で、アメリカ合衆国と三つの主要な関与を持つことになることと特定した。第一を9/11、第二を2022年10月7日と同定した。私たちは、第一の攻撃は霊的な栄光の地に対するものであり、第二の攻撃はイスラエルの文字通りの栄光の地に対するものであり、第三の攻撃は日曜法の地震時の攻撃であると指摘した。私たちは、この預言的次元におけるバラムの歴史が真理の印を帯びていること、すなわち、第一と最後の攻撃は霊的な栄光の地に対するものであり、中間の攻撃は反逆を象徴する文字通りの栄光の地に対するものであったことを示した。私たちはいまや、ナッシュビルの火の玉が成就するとき、真夜中の叫びのメッセージの始まりを画する第四の打撃が、霊的な栄光の地で起こることを見る。これは、バラムとその雌ろばの第二の打撃が二重であり、二つの打撃のうち第一が文字通りの栄光の地に、第二が霊的な栄光の地に加えられることを意味する。

その記事は不完全な真理を提示したが、ユダ族の獅子は、いまやそれを、イスラームとナッシュビルの火の球との預言的関連に対する別の証しとして明らかにした。イスラームと火の球との関連を支持する別の論拠は、聖史の改革の系譜のうちに見いだされる。あらゆる改革運動には、その全体を貫く固有の主題が備わっている。モーセの改革運動においては

、選民と契約に入ることが主題であった。キリストの改革の系譜においては、主題はメシアであった。ダビデの改革の系譜においては、主題は十戒と聖所であった。ミラー派においては、主題は時の預言であった。というのも、ミラー派は「時のメッセージ」を担っていたからである。9/11における第三天使の到来により、十四万四千人の改革の系譜における主題は、第三の災いのイスラム、東方の子ら、聖書預言の驢馬、黙示録九章の軍馬、東風、いなご、そして諸国民の怒りの激化であると特定された。

黙示録十一章の地震は、第三のわざわいに属するイスラームを標示するとともに、「真夜中の叫び」のメッセージの結末をも象徴している。「真夜中の叫び」は、キリストのエルサレム凱旋入城によって予表されており、その出来事はろばを解き放つことから始まった。ミラー派の歴史における「真夜中の叫び」の開始は、エクセターのキャンプ集会においてサミュエル・スノーが馬に乗って到着したことによって画された。「真夜中の叫び」の期間の開始は、イスラームの象徴によって標示されている。2020年7月18日の訂正されたメッセージが、警告のメッセージの一部としてイスラームを含むことを確認する豊富な証拠がある。日付は特定されていないが、ナッシュビルの火の玉は、終わりの日における「新しいぶどう酒」をめぐる論争を指し示している。ゆえに、ナッシュビルの火の玉にはイスラームが含まれる。しかし、その火の玉を核兵器と同定することについてはどうであろうか。

このメッセージは、多くの証人の証言に基づき、当該攻撃における敵対勢力としてイスラームを特定することを保持しなければならない。訂正を要する時の定め誤りは、1840年と1844年の双方によって典型的に示されている。時はもはや預言的メッセージの一部であってはならないが、数はなお含まれる。聖所に関する誤解によって表徴されている誤りもまた解決されねばならないが、それを解決して是正されたメッセージに組み入れる以前に、その聖所の誤解によって類型化されていた誤りを特定しなければならない。7月18日のナッシュビル警告において、その聖所の誤解は何を表徴していたのか。

私は、2023年末以来、封印が解かれ続けてきた光のうちに答えが見いだされると主張する。創世記、マタイによる福音書、黙示録において、第十一章に始まり第二十二章で終わる、各々十一章から成る三つの並行的系列は、十四万四千人との神の契約の更新である。私たちは、主の御声を聞かなかつたかのように振る舞ってその憐れみの申し出を退けるのか、それとも、人間的な力に頼ってひれ伏し、「主が命じることはずべて、私は行います」と宣言するのか。あるいは、聖霊に、主の律法を私たちの心と思い書き記すことを許すのか。

答えはまた、ダニエル書第十二章において、時を第一・第二・第三天使の使命として示す三節の封印が解かれることの中に見いだされる。これら三節はまた、七節において2023年12月31日を、十二節において2020年7月18日を指し示し、さらに十一節においては、一九八九年から日曜法、ひいては恩恵期間の終結に至るまでが表象されている。この三節に内在するこれら三つの真理は、予言の封印が解かれるときに常に生起する三重の試練の過程が提示されている、まさにその聖句の箇所には置かれているのである。

キリストは、ダニエル書第十二章に封印されていた三重の試練を単に解いたにとどまらず、それらの試練を、第一に基礎的試練、次いで神殿の試練、さらにリトマス試験とな

る試練であると規定した。さらに、その基礎的試練は2023年12月31日に開始し、外的な幻視を確立する象徴としての反キリストによって表象されているとおり、ミラー派運動の基礎的試練に基づいていることを明らかにした。

彼は次いで、第二の、すなわち神殿の試験を、ダニエル書第十章における神殿でのキリストの幻視によって表されているものと特定した。その試験は現在進行中である。ダニエル書第十二章の解封に際して示される1989年、2020年7月18日、2023年12月31日、および日曜法という諸期日は、ローマの幻視とキリストの幻視を含んでいる。これら両方の幻視は、第十二章の解封が見いだされるまさに同一の幻視の中に提示されている。この三章は一つの幻視であり、キリストの幻視は第十章の神殿の試験であり、反キリストの幻視は第十一章の基礎的試験であり、さらに第十二章における十四万四千人の道標は第三のリトマス試験を表し、そこで多くの者が清められ、白くされ、試みられる中で、愚かな者が賢い者から分離される。

神殿の試みはレビ記二十三章の光を明らかにした。それは契約の箱の光であり、すなわち第七日安息日のアルファの光、ならびに第七年の安息年のオメガの光である。アルファとオメガの安息日の光は、受肉の光を指し示す。その光は、神性と人性の結合を回復するために、神が人間の肉をお取りになることを指し示している。これは、1844年10月22日にキリストが始められた御業であり、今や生ける者の審判において締めくくっておられる御業である。

レビ記二十三章の光は、アルファとしての春の祭りとおメガとしての秋の祭りを結び合わせ、2023年12月31日から人類に対する恩恵期間の終結に至るまでの歴史そのものを形成した。このタイムラインにおいて、基礎的試練は2023年12月31日に到来すると示され、神殿の試練は2025年に始まると特定され、それはラツパの祭りのリトマス試験に至るまで続く。2023年7月に始まった「荒野で叫ぶ者の声」は、三部構成の道標の五日後に終わった種なしパンの祭りによって標示されている。次いで三十日間があり、その後三部構成の道標が置かれ、さらにその後五日が続いた。こうして永遠の福音の三つの段階が示される。すなわち、五日を伴う三部構成のアルファの道標が第一の天使、三十日が第二の天使、そして五日を伴う三部構成のオメガの道標から五旬祭の日曜令に至るものが第三の天使である。

キリストはまた、神殿の試みの時における契約の箱の製作に関するレビ記二十三章の光を啓示された。契約の箱の一方にある第七日安息日のメッセージまたは天使と、他方にある七年目の安息年の天使とは、契約の箱をのぞき込む覆いのケルビムを象徴している。十四万四千人の封印の歴史において、これら二人の天使の二重の光は、第七日安息日と道成肉身の教理を表し、それは永遠に研究される主題をなしている。

無論、あなたが「七つの時」を、1863年の霊的な奴隷解放宣言たるヨベルの年の象徴として見るができないなら、ウィリアム・ミラーのアルファとおメガの預言が「七つの時」と「二千三百日」であったことも見て取ることはできないだろう。互いに関連するこれら二つの時の預言の意義を見いだせないことは、1798年が「七つの時」を、1844年が「二千三百日」を表しているという認識を妨げる。そのような知識を欠いているなら、レビ記二十三章を行に行を重ね、すなわち春の祭を規定する最初の二十二節を秋の祭の

最後の二十二節と並置したとき、その行が1844年によって表される第七日の安息日に始まり、四十四節の行を結ぶ安息日が1798年によって表される地の安息であることを見るのは、事実上不可能であろう。

二つの安息日の関係を見いだせないことは、1798年の七たびが人性であり、1844年の二千三百日が神性であることを見通せないことを表している。そのように深い盲目のもとでは、第七日安息日のアルファの光と受肉の教理のオメガの光とが、キリストがご自身の神性を墮落した人間の人性と結び合わせる御業を指し示していることを、事実上認識するのは不可能に思われる。キリストがご自身の神性を私たちの人性と結び合わせる御業とは、1798年と1844年とを結合する御業にほかならない。というのも、1798年は人の肉を表し、1844年は神性を表しているからである。

人類は神のかたちに創造され、高次と低次の本性を有する。人間の高次の本性は肉に属し、罪の下に売り渡されている。キリストは回心の瞬間に、回心した魂にご自身の思いを与えられる。というのも、回心こそ義認が行われるところであり、義認されるとは義とされることを意味するからである。低次の本性は即座に贖われることはできず、低次の本性に関する福音の約束は、キリストの再臨において私たちが栄化された身体を受けるということである。高次の本性は思いであり、低次の本性は肉である。高次の本性は「七つの時」の預言であり、それは1844年10月22日の贖罪日に完結した。そのとき第七のラッパとヨベルの角笛がともに吹き鳴らされ始めた。低次の本性の「七つの時」は1798年に終わった。なぜなら、それはキリストの再臨まで新たにされ得ないからである。

1798年の七つの時、1844年の七つの時、および1844年に至る二千三百年は、1844年10月2日に始まったキリストの御業を表している。その御業は、キリストの神性を人性と結合することであった。しかし、人性と神性とから成る神殿が合一されるはずであった1844年にあっては、1798年は含められるべきではなかった。というのも、それは異邦人の庭を表しているからである。

神殿の試験には、神殿を測ることが含まれている。2023年に始まった封印解除の歴史の初期に、七つの雷鳴の封印が解かれたことにより、最初の失望から大失望に至る歴史が、七つの雷鳴によって表されている歴史の最終的かつ完全な顕現であることが明らかにされた。靈感は、この七つの雷鳴が、第一と第二の天使の歴史の間に起こった出来事を表すとともに、やがてその順序に従って明らかにされる将来の出来事をも表す、と述べている。この完全な成就是、2023年に与えられた最初期の啓示の一つである真理の枠組みの中に位置づけられた。最初の失望はオメガの失望を表し、その中間には、メッセージの「油」に基づいて賢い者と愚かな者が分離されたエクセターのキャンプミーティングがあった。

ミラー派の神殿は、ある失望から次の失望へと至る過程の中で建立された。したがって、十四万四千人の神殿は、2020年7月18日から、1844年10月22日のときと同様にたとえ話において戸が閉じられることになる、間近に迫った日曜法に至るまで建立されることが指し示される。七つの雷によって表象される歴史は、ダニエル書第十二章の光において示される歴史と同一である。ダニエル書第十二章の千二百九十日の光は、第十一節において表されている三十年の期間と直接に結び付く。それはまた、選びの民との契約の最初の代表

者と、文字どおりのイスラエルから霊的イスラエルへの契約関係の変化を明らかにするために起こされた預言者とによって画される三十年にも結び付いている。レビ記第二十三章の枠組みの中央にある三十日間は、神とのアブラハムの三重の契約の第一段階における三十年と同一である。第十一節における508年から538年までの三十年は、十四万四千人の祭司職の象徴である。

レビ記第二十三章の構成における三十日間は、キリストが昇天されるまで弟子たちに直接対面して教えられた四十日間の一部である。三十という数は、三十歳で奉仕を始める祭司を象徴する。508年から538年に至る三十年間は、異教ローマから教皇ローマへの移行を指し示し、かつそれによって、十四万四千人のラオデキヤの祭司職から十四万四千人のフィラデルフィヤ的祭司職への移行をも指し示す。この移行は三段階で進み、すなわち、508年に「日ごとの務め」が取り去られ、533年のユスティニアヌスの勅令を経て、538年の「日曜法」によって移行が確定したことによって表されている。

その三十年は、1989年から日曜遵守法に至る期間を表しており、その日曜遵守法において、神によって印を受けたフィラデルフィアの民は、神の宮として、全世界の前に高く掲げられるであろう。そのとき、世界は、神の民によって代表されているキリスト（その民はキリストとともに天において座しており、ゆえに神の宮のうちにある）に与するのか、あるいは、神の宮に座して自ら神であることを示す「罪の人」に与するのかを判断するであろう。やがて到来する日曜遵守法において、第十一時の働き人、すなわち大群衆もまた、根本的な試練に直面するであろう。第七日安息日が神の安息日なのか、それとも太陽の日が神の安息日なのか。

そして今や、彼の目前にさらに別の光景が展開した。彼には、ユダヤ人が御父の律法を尊ぶと公言しながら、サタンの業によってキリストを拒むに至ったことが示されていた。今や彼は、神の律法を退けながらキリストを受け入れると公言している、同様の欺きのもとにあるキリスト教世界を見た。彼は祭司と長老たちの口から、「彼を取り去れ！」「十字架につけよ、十字架につけよ！」という狂乱の叫びを耳にしていたが、いまや、キリスト者であると称する教師たちの口から、「律法を取り去れ！」という叫びを聞いた。彼は、安息日が踏みにじられ、その代わりに偽りの制度が据えられているのを見た。再びモーセは驚愕と戦慄に満たされた。いかにして、キリストを信じる者が、聖なる山において御自身の御声をもって語られたその律法を拒むことができるのか。いかにして、神を畏れる者が、天と地における神の統治の基礎である律法を廃することができるのか。モーセは喜びをもって、神の律法が、少数ながら忠実な者たちによってなおも尊ばれ、高められているのを見た。彼は、神の律法を守る者たちを滅ぼそうとして、地上の権力が最後の大いなる闘争に出るのを見た。彼は、神が立ち上がって地の住民をその不義のゆえに罰し、その御名を畏れてきた者たちが、その怒りの日に覆われ隠されるときに到来を見通した。彼は、神がその聖なる御住まいから御声を発せられ、天と地が震えるとき、律法を守ってきた者たちと結ばれる神の平和の契約を聞いた。彼は、栄光のうちにおけるキリストの再臨、義なる死者が不朽のいのちに甦らされ、生ける聖徒が死を見ることなく変えられ、共に喜びの歌をもって神の都へと上って行くのを見た。族長と預言者、476。

大群衆、すなわち異邦人であり一時間だけ働いた労働者たちは、土台の試練によって試され、その直後に神殿の試練が続く。罪の人を伴うローマの人間の神殿こそ、あなたが信

仰を築き上げるべき岩なのか、あるいは砂なのか。それとも、神性と人性とが結合した受肉の神殿、すなわちペテロが「霊的な家」と呼ぶ十四万四千人の神殿なのか。その土台と神殿の試練の時期にあって、迫害が第三の段階のリトマス試験を果たし、そののち人間の猶予期間は終結する。

ユダ族の獅子はいま、四十節の隠された歴史を補完し、キュロス、ネロ、トランプに関する三つの二百五十年の預言によって、さらに多くの光をもたらしておられる。そして、まさにナッシュビルの訂正されたメッセージを宣べ伝える働きを強調しておられた時に、それをなされた。ネロの系譜は、アメリカ合衆国、ついで世界において、獣の像を最終的に樹立するための枠組みを提供する。紀元前457年のキュロスの系譜は、ラフィアとパニウムとの間の歴史、すなわち、近く到来する日曜日令においてパニウムがアクティウムと結合することによって開始する第三次世界大戦とウクライナ戦争との間の歴史を特定する。トランプの系譜は本年7月4日に終結する。

ネロは迫害の象徴であり、スミルナの教会は、迫害が二百五十年後にペルガモの教会と妥協において終息するまで続く歴史を指し示している。この線は像の建立を指し示しており、ゆえに、キリストの御像がご自身の神殿において建立されつつある時の歴史と符合する。「勅令」は、第一の日曜日法へと至らせる起点であり、その後には、東と西、賢い者と愚かな者、麦と毒麦、そして救われる者と失われる者とを分ける「閉ざされた戸」が続く。その期間を開始する「勅令」は、世界に対して同一の試練の期間を開始する「勅令」でもある。ゆえに、「勅令」は初めであり、また終わりでもある。ネロの十七年にわたる線上のあらゆる里程標は、「勅令」（大統領の「行政命令」に類するもの）をもって始まる日曜日法の危機における、激化していく迫害を指し示している。

紀元前457年のキュロスの三つの勅令は、その末尾に三つの道標を備えた十七年の期間を指し示している。これはネロの系統、ならびにもう一つのキュロスの系統についても同様であり、これらの系統は1798年から1844年に至るまでの第一・第二・第三の天使の到来によって終結した。キュロスの三段階は、ラフィアの戦い、ついで第二段階までの十年、さらにパニウムの戦いまでの七年である。始まりと終わりはいずれも戦いであるため、アルファとオメガの刻印を帯びている。最初の十年の期間は、2014年のウクライナ戦争をもって開始した試練の期間を表し、第二の期間は七年後、パニウムの戦いで終わる。

パルモニ

パルモニは、第一の天使と第二の天使の歴史におけるミラー派に対して、時に関するメッセージの封印を解いた。彼はまた、十四万四千人の歴史、すなわち第三の天使の歴史において、数に関するメッセージの封印を解く。

マカバイの反乱によって表象される1776年から1798年までの二十二間に代表されるような象徴的預言史は、第六の王国の開始の原因と、第五の王国の終焉の原因を特定する。第二十二代大統領グローバー・クリーブランドは、非連続の二期を務めた唯一の二人の大統領の一人であり、その点において、オメガの大統領であるドナルド・トランプを予表するアルファであった。前任大統領の任期中に継承して就任した大統領を含め、かつ自ら再選を勝ち取った大統領と併せて数えると、トランプは二期目を獲得した第二十二人目の大統領である。聖書預言の第六の王国は、独立宣言から二十二年を経た1798年に始まっ

た. 1798年から2026年に至る期間は、アルファの日付における22とオメガの日付における22によって表象されている。

第十一章から始まり第二十二章で終わる、十一章で構成された三つの系列がある。これら三つの十一章の系列はいずれも、三節によって表される厳密な中点を含んでいる。『創世記』は、「割礼」が選民との契約関係の象徴として与えられた時を特定している。これは、契約の民を象徴するしるしが選民に与えられた最初の出来事であった。また『マタイによる福音書』においては、その中央の三節が、キリストがご自身の教会を建てるとされた岩を特定している。これらの節は、シモン・バルヨナの名がペテロへと改められた時を特定しており、これは十四万四千に相当する。『黙示録』におけるその系列の中央は、七つに属する第八の頭として教皇制を特定することによって、死の契約を指し示す。では、『Desire of Ages』において第十一章がバプテスマのヨハネのメッセージを特定し、第二十二章がヨハネの死を特定しているという事実は、いかなる含意をもつと考えられるだろうか。

これらの章の中ほどは168ページに当たり、そこで「ニコデモ」と題する章が始まる。第十一章は「洗礼」と題され、第二十二章は「ヨハネの投獄と死」と題されている。第十一章は死・埋葬・復活の象徴であり、第十七章および「ニコデモ」もまたそうであり、ヨハネの死もまた同様である。

これらの内容は次回の記事で続けます。